

第1部 座談会

欧米人の革命史ルポと日本の中国研究

《出席者》野原四郎・藤井満洲男・小島晋治

——中国研究所の共同研究のテーマの一つとして「中国革命史（研究）の再検討」ということが考えられています。このテーマについては、新しい事実の掘りおこし・評価の再検討など、長期的に継続して研究を進めてゆかねばなりません。そのひとつの作業として、今月号では特に《欧米のジャーナリストが書いた革命史ルポをどう読むか？》ということで特集企画をくむことに致しました。これから中国の革命史・現代史を勉強してゆこうという学生諸君や職場のサークルの方々のために参考になるようにと、考えているわけです。

一口に欧米人の革命史ルポといってもかなり膨大にあるわけですが、さしあたり重点はスノーからベルデンまで、つまり新中国成立以前までということにしたいと思います。ロベール・ギランその他、解放後・社会主義建設を扱ったものは、別に取り扱う計画です。ここでは、“総論”として、欧米人のルポというものが我々になげかけている問題、そこから何をどう汲みとるべきかというようなことについて、包括的に論じていただきたい。

小島晋治さんに、司会をおねがいして討論を進めていただきたいと思います。では、どうぞ。

（編集部・斎藤秋男）

日本人には何故書けなかったのか？

一戦前の中国研究の欠陥に関連して一

小島 日本でこれまでよく読まれてきた中国の革命史についての本といえば、日本人の書いたものではなくて、むしろスノーの『中国の赤い星』とか、スメドレーのいくつかの著作とか、ベルデンの『中国は世界をゆるがす』だとか、そういう欧米人の革命史ルポが一番多く読まれ、又日本人に大きな感銘を与えてきたと思います。では、どうして日本人自身がそういうものを書けなかったのか？という問題。また逆にいうと、どうしてあの人たちがそういうものを書けたのかという問題について、始めに意見を出していただきたい。

一つには、技術的な問題も確かにあると思います。つまり、あの時期は日本帝国主義が中国人民の最大の敵であって、日本人の中で中国の解放区まで行けた人というのは非常に限られていた、という問題もある。しかし、そういう問題を越えた

思想の問題というか姿勢の問題ということもあると思うわけです。

藤井 日本人が書けなかったということには、技術的な問題もあるし、もっと複雑な問題もあると思いますが、こういうアメリカ人の場合いえるのは、基本的にデモクラットであったということ、例えばスノーもいっているように、マルクス主義も少しは読んだ、ニュー・ディールの影響も受けたということもある。中国に行ったアメリカのジャーナリストの中でも色々分れていて、悪いのはまた極端に悪い。そういう悪い例もいっぱいあります。

そのなかで——スメドレーは私は別格だと思いますけれども——スノー、バートラムだとか、ベルデン、スタイン、フォーマンとかいう一連の人々は、基本的にはデモクラットとしての姿勢があ

って、しかもかなり戦動的なデモクラットであった。ということは、反帝国主義であり反封建主義であり、中国の民主主義的な発展を何とか支援したいという、こういう姿勢があって、その立場から比較的楽に解放区の状況・中共の政策を了解し受け入れることが、その人なりに出来た。日本のジャーナリストの場合には、そういう姿勢はなかった、あったとしてもアメリカ人の場合より格段に弱かったといえるのではないか。尾崎秀実のような少数の例外はあったにしても、全体としての侵略体制の中にきわめて緊密にくみ込まれてしまっていた。善意不善意にかかわらず、あの強力な侵略機構の中で、何をやっても結局は侵略の役に立つ、そういう状況の中では本当に、科学的どころか情情的にも健全なものが出てくる余地はなかったのではないかと思います。とにかくアメリカ人の場合には、反封建であり反帝であり特に反日帝である限りにおいては、中国革命の動きに多かれ少なかれついてゆける余地は充分にあった、ということでしょう。

しかし、そういう人たちを今日の時点までひっぱってきて考えてみると、やはり色々な問題がある。スノーなどは、大たい当時の考え方をそのまま曲りなりにも持ちつづけてきたと言えるでしょうが、例えばロバート・ペインなんか、当時のデモクラットとしても非常に不徹底な姿勢であったわけですが、まあ人民共和国成立まで、新民主主義ということならついてゆけたけれども、大躍進のころにはもうどうにもついてゆけない。彼はだいたい当時でも「第3勢力」を非常に期待していた人です。これはイギリス人だけれどもマイケル・リンゼイ、今のロード・リンゼイに至っては、人民共和国成立とともにほとんどダメになってしまっている。つまり、あの統一戦線時期までついてゆけたということにすぎません。ですから、多かれ少なかれデモクラットであった人たち、そして日本帝国主義に反対する限り中国革命について

ゆけたという人たちの中には、それぞれ段階を追ってダメになっていった人がいるわけです。そして、今の時点から振り返ってみますと、ダメになった人というのはそのころもやはり言うことがはっきりしませんでしたね。

野原 藤井さんの今の御意見に全く賛成です。ただ、少しばかり補足的なことをいいますと、こういうことがあるのではないかと思います。

我々にもかなり刺激を与えた満鉄グループの中国研究とか、講座派の日本史研究から出発した中国問題の研究者とか、そういう人たちが戦争中の間に体制の中にくみ込まれていってしまった。その点は、ジャーナリストと研究者の区別はないと思います。尾崎などは、非常に例外的な存在であった。しかも彼は古い中国に対する理解をもちながら、新しい中国をその上にたって考えるといったところがありました。その時分も一般に現代中国をやる人は、古い中国に対して理解が乏しかったように思われます。そうでないところが、尾崎のまた一つの強味でしたろう。

もう一人私のぼんやり知っている例外的な人物は、昭和10年代の初めに善隣協会にいた佐藤晴生です。佐藤はのちに満鉄の調査部に入って、山西省の太行山脈の近くまで接近して農村調査をやっているようです。おそらくあの辺の遊撃区にも足を踏み入れたかもしれません。そのときの調査報告が、大学ノート3冊にまとめられたそうですが、実はある場所に埋没されたままになっているらしい。報告内容をどういふものか確かめてみない以上、はっきりしたことは申せませんが、私の知っている佐藤の一面から推測して、彼のやった仕事も、例外的なものではないかと思います。佐藤は満鉄事件で獄死しました。

これまでに、中国革命史とかあるいはもっと広く中国現代史というものを、中国研究を始める人たちにどう案内していったらよいか、ほかの組織でもいろいろ考えられてきました。その一例

として「中国の会」の場合もあるわけです。例の新島・野村両氏が代表して編集した『現代中国入門』がそれです。この本をつくるための作業の過程でさっき小島君が提起したような問題が、非常に強く出されました。もっとも、その点について藤井さんがおっしゃったような面は、そう鋭くは指摘されなかったように思いますが、紹介してみましょう。第一に、アカデミックな中国史研究と現代中国研究とがバラバラにおこなわれてきた。とくに前者の研究陣は、むしろ近現代中国を無視し、軽蔑して、研究対象とすることを禁止した。そこには近代日本の学問分野に共通する一つの欠陥がみられます。

例えば卒論を書くにも、中華民国以後はテーマとしてもちだしても認められないようなこともあったくらいです。逆に、近・現代の中国をする側は、旧い中国についてはまるで理解がないままにきてしまった。これが中国革命を内在的につかんでいくことや、その特殊性を明らかにしていくことを困難にした。何か「情報通」がいろんなことをつなぎあわせて説明しているだけの観があった。といったことが指摘されました。

小島 日本の中国研究について言いますと、例えば平野義太郎氏以来、中国研究の科学的方法だとか理論だとかいうことは、戦前にもずいぶん言われてきたわけです。だが、例えばスメドレーにしてもベルデンにしても、そういう社会科学の理論に従って書いたというものではないだろうと思うのです。中国をああいふうにつかんだ見方というのは、で、一方では科学的なマルクス主義というものを理論なり学問の方法としてつかんでいながら『大アジア主義の歴史的基礎』を書いたり、また戦時中さまざまな中国社会の科学的分析なるものをやったのだけれども、一つとして中国の問題をスメドレーやスノーがつかんだようにはつかめていない。ということを考えますと、理論というものが、自分の生活なり見方なり感覚までをも

規定する思想と分離されてあったのではないか、という気がするのです。だから、さまざまに一見「科学」的に解釈はするのだけれども、とうとう中国の動きをつかめなかったという、そういう問題があった、それに対しスメドレーやスノーの場合、アメリカの社会の中での生活を通してほんとうに身につけた変革の思想をつうじて中国を見ている。そこに決定的な違いが出てきたのではないかという感じを、私はもつわけです。

藤井 中国ではよく、立場・観点・方法ということと言いますね。この三つは統一されているが、やはり区別しなければいけない。結局、そのなかで一番根本的なのは立場だろうとおもいます。もちろん、方法が間違っていれば、やがて立場まで脅かされる事態になるということはあるけれども、しかしその中で一番根本的に規定するのは立場だ。その立場というものが——これは一言でどうというのはむづかしいけれども、根本的な姿勢といってもいいし、何かひとつ腰がすわっていないければ、いくらありあわせのところから、たとえばマジャーノなどをもってきても、これを「大東亜共栄圏」のための理論に組み立てることだって出来ないことはない。やはり決定的なのは姿勢というものではないかと思えますね。

野原 実は僕らは、アカデミックな学問ギルドで育ったのです。それですから、マジャーノとかウィットフォーゲルとか、そういったものを紹介してくれる満鉄とか講座派の人々に対して、何といいますか大変なあこがれを抱いていました。しかし、段々世の中の状況が悪くなってゆく中で、多くの現代中国研究者が体制内に組み込まれた結果、ああいふ理論は中国の「停滞性」なるものを解学的に説明していくことになりました。現代中国蔑視のいわゆる東洋史研究家とえらぶところがなくなったのです。

その点をもう少し詳しく考えてみますと、体制に組み込まれてしまったということは、つまり

日本自身の変革の問題がどこかに置きわすれられてしまった、ということは、つまり日本自身の変革の問題を身につけない限り、こういう結果しか出てこないのではないのでしょうか。

つきつめれば確かに藤井さんがさきほど御指摘になったようなことなんだが、しかし我々自身の問題をふまえない研究とか、非常に解釈学的である、とかいう形式的な問題を取り上げてみますと、戦前とくらべて戦後は果してどれだけ進んでいるのでしょうか。戦後にもなお尾をひいているものがないかどうか、考えなければいけないと思います。文化大革命などについても、やはり解釈学的な論が相当多いのではないかという感じがします。

ブルジョア民主主義者の限界性

藤井 さきほど言ったことにも関連するのですが、要するにデモクラットであるか、デモクラットであるとしてもどういうデモクラットであるか、それをさらに乗りこえているかどうか、ということです。デモクラットというのはつきつめてゆけば、結局ブルジョア民主主義なのですから。まあデモクラットでも——これは中国国内でも、そうですが、ある段階まではついてこれた、しかも人民共和国になってからでもある段階まではついてこれた。しかし今日の段階ではデモクラットではとてもダメだ。もっと根本的な、プロレタリア的なものが要求されている。それが、文革というものが一番きびしく出している問題ではないかと思っています。例えば、今はどういう評価がされているか知りませんが、59年に彭徳懷が暴露されたあの段階では、彼は要するに民主主義革命の時期に民主主義者として入ってきたのであって、もうこの段階ではダメになったのだ、というふうな指摘が中国でもされていたと思います。現在の走資派といわれる人の中にも、基本的には自分がめざすのは共産主義であり、やっているのは社会主義建設であると、そう自分では思い込んでいたものが

すくなくあるまいと思う。ところが、しかし彼の考えていた共産主義というのは実は非常にあやふやな“豊かな生活”というふうなものであったり、することなすこと全て資本主義復活の道を歩んでしまったりする。それは何故か？ 結局彼の“共産主義”なるものが、たかだか民主主義のワクを越えられないものだったと思うのです。僕は、文革が出した一番けわしい問題というのは結局そこにあるのであって、日本の今の発展段階の中にあるのであって、マルクス・レーニン主義者と言っている人びとが実はブルジョア民主主義者にすぎないということもある、思想の問題ではそのワクの中に停滞しているというのが相当に多いのではないかと思うのです。そこを、非常にきびしく考えなければいけないのではないか。

僕のある経験からいいますと——僕は58年まで中国にいたのですが、52～3年にあの過渡期の総路線というのが出された。そのときに、ある中国人の友人が来て言うには、これは社会主義だ、これをうち出したら日本ではずいぶん新中国への支持がへるだろう、と言うのです。僕は、これはまたずいぶんとナイーブなことを言うと思ったけれども、しかし実はそれが本当なのですね。社会主義というものをきびしく考えれば、今までの新民主主義のあの穏歩前進でもって新中国を支持していた、ないしは好感をよせていた人びとのうちに、相当するどい抵抗を感じる人びとがうまれるというのが本当だったのかも知れない。ところが、外国にいて離れているとどうもそれがピンとこないのか、それ以来ブルジョア・インテリゲンチヤが一斉に新中国に背を向けて脱落したというふうなことには、日本ではならなかった。何もこの段階で皆がみなそうでなければならんということではないが、しかと問題のきびしさというものをやはり考えてみるべきであったと思う。その友人が言ったことは別にナイーブなものではなく、それが本当なので、そうでなかったとすればそれは何

故か、ちょっとおかしいではないかと考えるのが案外自然だったのではないか。そこには本質的な問題が含まれていたのではないかと思うわけです。

中国を研究する上で、中国そのものの発展段階に応じて、これから先もまだまだこういう問題があると思います。その場合、どの段階にもまあ重大な抵抗なしについてゆけるというのは必ずしも自然ではなくて、そこには相当深く考えてみなければならぬ問題があるのではないかと思います。

野原 藤井さんのおっしゃったことには私全面的に賛成なのですけれども、そのお話しはやはり非常に難しい問題を含んでいるではありませんか。何故かという、それを一般化してしまいますと、今までは民主主義的な段階だから理解もどいたしついてもこれたけど、社会主義建設に入ってきたらそこまでは理解がとどかないんだという、こういう問題はですね、場合によってはソヴェトの場合にもそれが言えた段階があると思うのです。しかし、その場合と中国の場合とは、

かなり違った問題があるような気がします。確かに、それはそうなんだけれども、その内容自体は、もう一度検討してみる必要があるのではないかと思います……。

小島 かなり大事な問題が出てきていると思いますが、この問題はむしろ結論の部分にあたるようなことですのでまた……。

野原 ちょっとまって下さい、その結論を導くためにもう少し申し上げておきたいと思います。一番はじめに出た問題でもあるのですが、やはり自分の国の変革について理解を持つという努力がないと、結局中国のことも解らない。といった状況が、いよいよ我々の面前に出てきているのではないのでしょうか。例えば、学生運動などに対して、初めっから警察的に取締るような側と一緒にって物を考えているのでは、中国のことや世界のことも解らないというような、そういう世界的な問題を中国が代表している、そこまで今はきていると思うのですね。

中国を見る眼——研究者の問題意識・研究姿勢について

小島 先ほどの藤井さんの御意見とも関連するのですが、日本の戦後の中国研究というのは一とくにこの中国研究所の研究などはそうだと思いますが、中国人のものをそのままってきて紹介するという研究が主だったのではないかと私などはそういう印象をもっているのです。それでいいのかどうか、という問題が一つあると思います。それから逆に、例えばスノー、スメドレー、ベルデンなどが、その時期のアメリカ人民の直面している問題から出発して中国を研究する場合に、中国人自体の発想とズレてきている問題はないのかどうか、という問題もありますね。

戦後の日本の現代中国研究のあり方として、一つは、中国ででたものをそのまま翻訳して出して

ゆくという仕方、もう一つは、アカデミズムの内部でのいわばアカデミックな実証的研究とか、いわゆる「科学」的法則をあてはめての解釈的研究、そういう傾向がやはり強かったのではないかと思います。

野原 まあネガティブな話をすれば、これは多分、50年代のことでしょうね、ある日本の代表団が中国を訪問した時のことです。日本人側から、農業生産協同組合の問題について質問をしたわけです。そうしたら、向うの人は日本人の質問が余りに微細に互っているのに驚いてしまったそうです。「どうして我国のことをあなた方はそんなにお調べにならなきやらないのですか」っていうわけです。これは、いかにも皮肉な話です。

解釈学的なんだな、日本の学問っていうのは。自分に問題があれば、急所をつくと思うんですが。向うの人だって知らないような実に瑣末な事が問題にされる…。

藤井 野原さんが言われたのは、結局なぜ問題意識が、はっきり言えば妙なものに突っ走ってしまうかということだろうと思います。僕自身は、実は前からこう思っているのだけれども、翻訳結構、紹介結構、むしろまだまだ足りないと思うのです。ただ問題は、問題意識だ。文革の評価にしても、毛沢東思想の系統的な研究にしても、まだまだ毛沢東著作本体に即してやらなきゃならないことがいっぱいあるのではないかな。それはそれとして、やはり必要でしょう。もちろん、トリビアルな瑣末な考証とかいうことが問題ではなくて、やはりその中の大きな根本的な筋をつかまえないといけない。ただ単に、それをそれとして祖述するのではなくて、やはり我々は我々としての問題意識をもたないといけないと思うのです。向うの公式の正面の文献だけでは足りないという意味ではなくて、公式の正面の文献をもっともっと咀嚼しなければならぬ。それをしないで、こちらとしての問題意識をもたないでやると、単にスローガニヤリングをくり返すことになって、読む人もうんざりするし、その中から生き生きした斗争なり思想の発展なりをつかむことができない。だから、祖述そのものがいけないということではなくて、それを我々の問題意識でもって発展させることが重要なのだと思うのです。……どうも話が抽象的すぎて恐縮ですが。

小島 では、少し具体的な話を出しますと、最近中国研究者以外の人で文化大革命について色々発言するということがあるわけです。例えば竹内芳郎氏が今度チェコ問題で座談会をやっているのですけれども、彼は、中国におけるさまざまな大衆行動の中で動いている行動の要素こそ直接民主主義だ、自分はそう理解する、チェコにおける

ような自由化とは違うもっと高度な民主主義を自分はあるのを見る、と言うわけです。すると他の人が、しかし中国はそれを直接民主主義なんて言っていないじゃないか、と言う。竹内氏はそれに対して、それは確かに中国は言っていない、しかし私は私が今生きている世界の中からあれこそそうだと感じる、と言うわけです。これが当たっているかどうかはともかく、このようなつかみ方こそが大切なのだと私は思いました。中国の中で色々な言葉が出てくる場合に、やはり中国自身の現実の生活の中から言葉や概念が出てくるわけですね。それを言葉、しかも同じ漢字で書かれているためにそれを日本人の感覚で、そのままうつしかえて理解したのでは、我々が実際に学ぶべきものと違うものを勝手に解釈してしまうことになることが多いのではないかなと思う。例えば、大衆路線という言葉もそうだと思うのです。あれは中国における実際の運動の仕方と、日本で大衆路線という言葉で理解したものとは非常に違うと思うのです。

『学生通信』という三省堂の出している高校生向けの新聞があるのですが、その最近号に例の「夜明けの国」を撮った時枝俊江さんが中国での経験を書いている文章がのっていますので、ひとつ紹介したいと思います。紅衛兵がトラックに乗ってしきりに毎日よびかけているっていうんですね。……文化大革命を記念する塔を建てる。どんなふうなものがよいか意見を言ってほしい。今言えない人は人民委員会の前の広場に言いに来てほしい。毎日やっているんです。そのトラックのわき腹には今まで出た意見がずっとはられている。で、とっても自分は不思議な感じがしたっていうのです。どうしてこれ毎日やるんだって聞いたら、きのうこれを聞かなかった人がいるかもしれないから何日でも同じことをするんだ、というふうに説明された。そうすると、自分たちのように過半数でもの事を決める手続きや制度が民主主義だと思って

いる人間には、ちょっと簡単にはこのことは解らない。皆んなの意見を聞くという実態は、実はこういうあきれるほど気の長い、しかも積極的な行動が保証しているのもであって、それが結果的には最も早い方法になるのかもしれない。つまり、皆んなが意見を言ったり、皆んなに意見を聞いたりするということは、こういう行動に支えられているのだということを知った。……というふうに、非常に新鮮な驚きを感じられているわけです。

我々が中国のものを翻訳するときには、いわば言葉のただ移しかえをやっている場合が多くて、それが中国の実態について間違った理解を与えてしまっている場合があるのではないかと、思うのです。ですから、私も翻訳や紹介それ自身を悪いとは決して思わないのだけれども、その場合の方法ですね、それはよほど考えないと、かえって間違ったもので、しかも日本人に衝撃を与えないような中国像を提起してしまうのではないかと思います。

藤井 私も、その点はそのとおりだと思います。

さっき言った点を少し補足しますと、文革が起ってから、よく中国研究者に対して、建国以来の路線斗争って言うけれども、いままで中国研究者は一向そういうことを感づかなかったじゃないか、そういう問題を提起もしないし、解りもしなかった、全くフィをつかれた。むしろ今まで中国について否定的なことを言っていた、つまりやれ指導部にも派閥があるとか、国際派だとか民族派だとか言っていた向きの方が、結局今の事態を予想していたのじゃないかと、そういうふうな言い方がありますね。つまり、進歩的中国研究者が恥をかいたといういい方です。

僕は、まあこれは恥でもあり恥でもないと思いますね。中国自身でもやはり、文革が始まって革命がこの段階まで進んできたら、非常に戸惑って右往左往した人も非常に多いんで、こう革命が急激な発展をすると見透せなかった、ないしはこれ

にフィをつかれたということは、これ自身は、殊に海をはなれてやっている研究者にとっては必ずしも恥ではない。ただ、例えば表面にあらわれた資料の扱い方一つにしても、僕らはまあやはり活字なり電波なりというものから資料をうけとるのですが、その場合、活字なり電波なりというのは僕らだけでなく台湾やアメリカも見たり聞いたりするわけです。で、これに対して必要な統制が加えられているということは当然考えられなければならない。その場合に、これを十分に補うだけの、トリビアルでない、本筋についての問題意識をもって立ち向っていたかどうかという点、これがやはり非常に足りなかった。この点では恥かしいと言えるでしょう。例えば、中ソ論争にしても、中国の国内では相当早くから解っていた、もう20回大会の直後には相当大衆レベルで解っていたことです。しかし、新聞にも出なければ放送もしない。それは、僕はやっぱりつかまなければいけなかったと思います。中ソ論争でフィをうたれ、文革でフィをうたれ、ということは、これからの心構えとしては当然考えなければいけないでしょうね。公式に発表されたものだけをただ紹介してこれで事足りりとするのでは、やはりスローガンの羅列になってしまう…。

野原 私自身のことを言いますとね、実は58年ぐらいまでなのです、中国について目を向けていたのは。58年以降、私なんか全然中国のことを勉強していません。それは、中国に対する関心がさめたというのではなくて、むしろ何か「我々として中国を勉強する仕方があるんじゃないか」という、研究姿勢に関するような問題、それが非常に気になったわけです。で、当面私は日中関係史を中心にしていたのです。中国自体の問題にはずいぶん御無沙汰してきたのです。そうしているうちに、紅衛兵の問題なんか出てきてね。いよいよ見当がつかなくなってしまった。さつき藤井さんが言われた大きな筋みち、それさ

えどう進展しているのか解らなくなった。それは、私のような研究者だけでなく、一般の人びとにとっても同様だったと思われる。またヨーロッパの言論界などをみても、同じような事情がみられる。つまり、とんでもない国だというのが、割合に一般的な受けとり方だったという気がします。

ところが、最近の世界的な学生運動の波のなかで、一方では例の南米におけるゲバラなんかの活動があり、アメリカの黒人運動があり、またベトナム戦争も激しくなってくるにつれて、しだいに中国問題について新しい関心をそそられてきたのではないか。学生運動が世界的な風潮として出てきたことによって、逆に中国に対して眼がさめたというか「ああ中国がやっているのもやはりこういうことなんだな」という、理解がおこってきている。これは、私自身の中におこった変化ですけれども、一般の人の間にもそういう変化がおこってきているし、ヨーロッパあたりでも中国について新しい関心が高まっている。こういった状況の中で、我々日本人の中国研究者は、どういう姿勢で中国を勉強していったらよいかという問題が、あらためて、生じているのではないか。基本的には、日本の問題であり世界の問題でもあるものが、中国の問題でもあるんだ。そうとらえてゆく姿勢がこちらにないと、日本人に向けて話をしかけても、また外国の研究者に向けて話をするためにも、我々の欠陥になるのではないか。中国のことをオウム返しにするというのは、そういう意味で、いよいよいけないのじゃないか。

中国人としては、従来もつぎのようなことがあったと思うのですよ。例えば、空気や水のようなものであったりして、彼ら自身としては、それと気づかないでいることがあって、それが我々外から見るとっては「ああこういう点か」と気付くようなことがある。彼ら自身にとってはあまりにも日常的事となすのだから、もちろん自分自身で書いて指摘することもない。これは新島君から

聞いた話ですが、例えば、文革で出てきた、いく人かの英雄の話にしても、彼らに関する新聞記事だけだと、まるで毛沢東思想・毛沢東思想ばかりいっていて、最後には自分の身を犠牲にしてほかの人を救う話になっておわりです。そういう話を聞いているとね、どうも中国っていうのは、ちょうど日本の戦争中のバクダン三勇士のようなのがいるのじゃないかって気がするわけですね。ところが、彼らの書いた日記をみると、もっと難しい問題が伏せられていることがわかる。現在の中国における二つの路線の斗いに直面して、段々と毛沢東思想に近づいていくには、人しれず、いろいろな悩みをきりぬけていったのであった。最後に身を犠牲にしたのは彼にとっては全くそういう偶然のチャンスがやってきたということである。その方ばかり力を入れて、バクダン三勇士のような話を中国人自身は書いてしまうことになるのだが、しかし、彼ら自身にしてみれば余りに日常的でわかり過ぎていて、省略したことさえ気がつかないでいる場合だってあるだろう。それをそのまま日本人がオウム返しに紹介したら、ダメである。むしろ苦闘のなかで彼が毛思想をどう身につけていったかという形でその英雄を紹介するならば、日本人たちにも中国のことが理解できるのじゃないか。中国の現実の姿や動きとともに、中国人のそういう人間的な努力がよく解るし、そうすればかなりリアルに中国社会がつかめるのではないか。その意味で、中国の文献をそのままのみにすることは、我々としては考えなおさなければならない。どうしても我々が日本の国の変革の問題およびそれにつながる世界的な動きというものをよく見つめて、その上にたって中国にとりくむ。そうすれば、そんな紹介の仕方をしなくなるだろう。

率直に言いますと、私はこれまで紅衛兵の運動なんか何のことかよく解らなかったのです。しかし、今となって考えてみますと、日本の労働者の

一般状況やこないだの「5月革命」におけるフランス共産党と上層労働者の動きなどは、何かそっぽを向いている感じがしますね。現代の変革では前進が始まろうとする場合、若い学生たちが起爆力として動き出すのが実情のように思われる。それはおそらく中国の場合でも同じだったと思うのです。そこに、ソ連的な——管理社会とでも言うんですか、ああいう変な“社会主義”ではなくて、本物の社会主義を実現しようとする、世界的な努力が出てきているのでしょう。「5月革命」の動きは、やはりその方向にすすむものだと考えます。そのような問題は日本のなかにもある。といったそういう全般的な理解があれば、おそらく中国の本筋を日本人に伝えることができるでしょう。

それでね、私もようやく、58年でやめていた中国研究へこの辺で立ちもどれるかもしれません。自分でそんな感じがしているところなのです。われわれが自覚すべきことは、いま中国へ関心を持ち始めた人びとにとって、解釈学的な中国研究が甚だ無力なものにみえるにちがいないということです。おそらく、こういった人びとのなかから、将来有力な中国革命史の研究家が生れてくるでしょう。

小島 その学生運動について、例えば『中央公論』

の学生運動特集号なんか読んでみますと、学生の書いたものや学生運動にそれぞれの立場でとりくんでいる平井啓之さんとか羽仁五郎さんなどの書いたものをみると、文化大革命をその中でうけとっているわけですね。例えば、九州大学のある学生は、ブルジョア社会の中の大学というのは、精神労働と肉体労働の分離を前提にしている、労働者を知識や思想からシャットアウトすることを前提にしてある。我々はそういう大学をプチ壊さなければダメだ、という言い方をしていますし、平井さんが同じように、知識人の否定というようなラジカルな教育革命について語っていますね。それは確かに、我々にとっては大変な苦痛ですよ。そう簡単ではない。自分自身の在来のある方に挑戦されるわけです。そういうものとして、文化大革命をうけとらないと、いくら解釈しても本当はダメだ、という気が私はするのです。

野原 その意味では、僕も、中国に対する理解が広がっていくばかりか、ますます深まってゆく条件が、いま日本にも世界全体にもある、生れつつあるのではないかと思います。その点がわかっていないと、中国研究者というのは、みんなの要求に対してこたえられないのではないのでしょうか。

スノー、スメドレー、ベルデン 以外の人々の諸著作をめぐる

——さきほど藤井さんから、スノーからベルデンという筋のなかで、スタイン、フォーマンそれからバートラムなどという、戦争中に辺区政府の時代の解放区へいった人たちの名前が出ましたし、それから野原さんが前にさかんに言っておられたミュルダーだとかを含めて、各論でスノー、スメドレー、ベルデンはとり上げられるわけですから、むしろ各論でとり上げられていない著作のなかで、こういうものはこういう観点でということがあれば、ぜひお願いします。それから、文化大革命を

経た現在の段階でも、あの時期のああいった人たちの中国革命のとらえ方というのは依然として有効性をもつのか、あるいはもっていない部分があるとすればどういう点か、そういう点についても御意見があれば出して下さい。（斎藤）

野原 ミュルダーについては、こういうことがあったのです。僕が学校で“社会主義と民族問題”について話をして、終ってから学生たちと討論しているうちに、一人の学生が「我々としては、中国をどう見るかを論ずる場合、中国では福祉とい

うものがいかに実現されているかといった観点から見るのです。いわゆる福祉国家が、もし言われているように実現されているのであれば我々としても中国のやり方に賛成せざるをえない。しかし、その点がどうもはっきりつかめない」とこう言うのでした。学校の中には民社系のグループができていて、その学生もあるいはその一人なのかも知れませんが。僕などの話をいっまでも残って聞いていて、そういう質問をする。学生なんかに会うとこんなことを考えます。我々自身は福祉国家について一つの見解をもっていて、それを自明なものとして心えています。もしそうした問題から中国をみようとする人があるならば、その理論についても、もう一度一緒に考えてみるのがよい。福祉国家の見本としては、たとえばスウェーデンなどがあげられるでしょう。ミュルダーは、スウェーデン人です。その彼が中国へ行って何を感じたかということが、彼の紀行文で具体的に明らかにされていますから、福祉国家の視点から見ようというふうな人には、その書物を教えて上げるのがいいんじゃないか。こんな場合には、「易から難へ」などの順を追わんで、彼が関心をもっているところへパッとぶっかった方がいいと思います。そういう人は自分の問題をもっているのだから、立派だと思えますし、そういう人たちの急所をつくような著書をボンと出す方が望ましい。

※注 ミュルダー『中国人民の声』（大久保和郎訳。筑摩書房。1965年）

藤井 ええ、そう思いますね。例えば、婦人の問題についてなら、ポーボワールのもので役にたちますね。ただ、ああいうふうな、殊にミュルダーのような腰をすえた仕事は日本には何故ないんでしょうかね、これはさっきの話とはまたちょっと次元が違ふと思います。

スノーが書いているレヴィ・アレーというニュージーランドの社会活動家、かれなどは解放区のベチューンとならんで、ある意味では民族統一戦

線を代表していますね。（斉藤）

野原 アレーの本ね、あの『ヨウ・パンファー』は、翻訳が出てませんね。

——アレーについては、鹿地亘が「砂漠の聖者」というので書いてます…。（斉藤）

野原 それだけです。もったいない。あれは、ぜひ何らかの形で皆んなが読めるようにしたいですね。ニム・ウエルズの「赤い塵」の下巻もまだ出ていません。

藤井 ストロングについても、『中国人は中国を征服する』は翻訳がずっと前に出ていますけど、僕は、それこそ今の時点まで潑刺とついてきたストロングおばさんのものとしてね、もっと読まれていいんじゃないかと思えますね。あれは、国内戦争期、つまり抗日戦争後の段階について相当書いていて、しかも例えば中ソ関係についても相当ふれている。ストロングがもうソ連を追払われてから書いたのだから、相当あけすけに書いていますね。「国内戦争期のソ連の報道をみると、延安を三ヶ月死守したのちにやむをえず放棄したというふうなことを書いている。全然人民戦争がわかっていない。延安は、スターリングラードとは違うんで、三ヶ月死守したなどということはまるでないんだ」というふうなことを相当ずけずけと書いている。あれなども、誤訳を訂正し音訳のところなどキチッとほめた新しい版がでて、もっと読まれていいんじゃないかと僕は思います。

小島 ストロングの『チャイナズ・ミリオン』というのも訳されていませんか？

藤井 これは戦前のものだけでしょう。戦前のメチャクチャなやつ。翻訳も悪いし、バツェンだらけでどうしようもないですね。

小島 あれもどこかで訳してもいい本だと思うな。

藤井 さっきの、あの文革以後の段階でも、ということに関係あるのですが、こういうルポの類いを読むときに、その中から汲みとるべき問題点の一つは、コミンテルンないソ連と中国の党との

関係ですね。これを示すものはたくさんはないけれども、まあストロングなんかは相当いろんな形で触れている。僕は、この問題は非常に重要だと思うんですよ。つまり、あの場合、国際的な公認された思想的・政治的・組織的な中心があった、それに対して中国の党ないし毛沢東は、どうこれとの関係を処理していったかという問題。これは、中国そのものとしては、今までにも出さなかったと同じように今後もし出さないと思います。全て中国の国内問題、中国の党内問題として扱っている。今後、中国が何かの文献で正面からこのコミンテルンとの関係の問題をとりあつかうことはまあ考えられない。しかし、革命史をやる以上、我々としてはこれはどうしてもやらなければならない。いま現に、毛沢東思想を日本にどう受入れるかという問題がおきているわけですが、これはそれこそ、この間毛さんが言った「日本の実践とどう結びつけるか」ということであるわけで、では中国ではどう結びつけたかという、その中には非常に深刻で複雑な教訓がたくさんあるのではないか。そうすると、そういう点をこれらのルポルタージュの類いからも引き出してゆくということが、一つの課題になると思います。

それからもう一つは、これはおそらく今後中国でもっとはっきりしたものが出るだろうが、遵義会議で一応指導体制が確立した後の党内の路線斗争の問題ですね。しかしこの問題はおそらく外国人のルポルタージュの類いでは余りつかめないのではないかと思います。この面ではあまり収穫はないかもしれませんが、前にいったコミンテルンないしソ連の党と中国の党との関係の面については、これからは相当掘ってゆけるんじゃないかと思っています。

野原 ちょっと話はズレますけど、私なんか見落していたものが随分あるのですが、例えばマルローの『人間の条件』だとか、トロツキーをはじめとするいわゆるトロツキスト系の中国革命論、そ

れからアイザックス、ああいうものについては割合日本の進歩的中国研究では扱っていない、むしろタブーにして来たところがあるのですが、いかがでしょう藤井さん、そういう方面について「いやこれはこういう意味があつてこうなんだよ」とか、そういう点を少しお話し願えませんか。私、全然読んでいないもんだから……。

小島 例えば、アイザックスの『中国革命の悲劇』はかなり読まれている。あれは、あの時期のデータが非常に豊富ですね、あの蒋介石の弾圧のすさまじさという面については、僕などはあれを読んで眼を見開らかされた感がありました。

藤井 今出ている翻訳は、古い彼がトロツキストと称していた時の版によっていますね。

小島 あれは、日本ではとても手に入らない当日の民国日報だとか、ああいうものをものすごくたくさん引用しているんですね。

藤井 彼は自分でも相当動いていたようです、ある時期までは。だからあの系統のものも、その中の豊富な具体的なデータについては、特に今の問題——コミンテルンと中国の党の問題をやる時には、充分使えるのではないかと思います。

※注 アイザックス『中国革命の悲劇』上・

下（鹿島宗二郎訳。至誠堂。1966年）

小島 ただ私は、ドイッチャーのものや、それからトニー・クリフというイギリスのトロツキストが書いたもので、今度雪山さんの訳で出る『マオズ・チャイナ』というのを読んだんですがね。トロツキーもドイッチャーもこのトニー・クリフも共通なのですが、やはり西欧の非常にオーソドックスな、ある意味では古典的なマルクス主義から中国をみている。だから、中国の農民のもっている性格をヨーロッパやロシアの小農と同じレベルでしかつかまないと、その革命的エネルギーをブルジョア民主主義的な意味でしか評価しない。農民＝プチブルジョア論みたいに割り切る。そういう視点でアジアの革命というものをみていく観

点では、アジアやアフリカ・ラテンアメリカの革命はつかみきれないのではないかと思います。まあこれはトロツキストに限らず、ソ連や日共にも多分に共通しているところだと思いますけどね。

藤井 中国が、当時のトロツキストに対して、今でも前と同じ態度をとっているのは、結局そこです。その点では、毛さんの路線とは根本的にあわない。

小島 ところが、最近の第4インター系のトロツキストの中に、むしろ植民地やなんかの方が世界革命の中心だとして、その地域の農民に一つの革命のエネルギーの根源をみるという傾向が出てきて、内部に論争があるらしいですね。特にラテンアメリカなどにその動きがあるらしい。それで、トロツキーのそういう点を教条主義的誤りとして批判している。

文革以後にも有効性をもつか？

小島 どうでしょうか、文革以後にも有効性をもつかどうかという問題について、もう少し。つまり具体的事実としては、文革の中で出されて来ている新しい事実から見ると合致しないところが、スノーのにもベルデンのにもあると思うんですね。また逆に、例えばベルデンのものなんかを読んでみると、今の問題を萌芽的に示唆しているようなところもあるわけです、読みようによっては。

藤井 まあ大体あの時期に向うへ行って、中国の実状なり中国党の路線や性格なりを適切に正しく受けとってきた人というのは、当時毛沢東のまわりに結集した指導部に対して、これを完全に一枚岩のものとして受けとってきた。したがってその書いたものの中には、最近暴露されてきたような劉少奇のいろいろな動きだとかそういうものは、ほとんど反映されていない。むしろ、その当時のスポークスマンというか、例えばストロングにしても、毛沢東にも会っているけれども、一番多く講義を受けたのは劉少奇であり陸定一であるわけです。そういう意味では、いろいろ吟味しなければならないこともあるだろうと思うのですが、しかし、その当時の中国党の路線なり政策なりというものを、どうその人たちがつかんだかという点については、個々の事実は別として、まあルポとしてみる限り大筋においては大きな問題はないと思います。スノーにしても、今でも一番よく読

まれているのは、毛沢東の伝記の部分と長征の部分、そういうところが多いのではないのでしょうか。そういう中にも、もちろん新しい違った事実はこれからも出てきましょうが、そういう個々の部分はそれとして訂正すればよいわけで、基本的な点は今後も充分に読まれる価値があると思います。

小島 ベルデンのものでは、薄一波だとか楊秀峰だとか、直接ぶつかる名まえが実に多いですね。しかし、例えば金華という女性を出してきて、ああいう人間解放に対するライター自身にある熱い願いが発現するというのが、やはり一番光っているんじゃないのでしょうか。

野原 私はね、さきほど藤井さんが言われたことでもあるんですが、文化大革命が起って、例えば楊秀峰が批判されるということにしても、それはあたりまえの話で別に不思議ではないと思う。その人たちの努力が足りなければ、批判されたって不思議でない。しかし、これから先の話は、私らしいんで、こんなことをいう私なんかも批判される方になるんだろうけど、楊秀峰がああ抗日民族統一戦線の中で果たした役割りというものまで抹殺することは、我々日本人としてはちょっと、いや僕のような人間はだ、決してやらないんだ。中国では現にやっているが。しかしもちろん、今こうだからといって一つの歴史的時点における劉少奇の役割りまで否定してしまうことは疑問だな

どと、そこまでこの問題を一般化するつもりはない。彼については、特に抗日戦後の国民党との問題で、いろいろなことがあったようですね。どうも確証されていないところもまだあるのではないかと思います。そういった可能性は大いにあると思います。だけど、楊秀峰の場合など、ベルデンの記録によるほかないのですが、あれを抹殺するのはね。そんな感じがするわけです。中国でそれを否定する気持ちは、わからないではないのですが。

小島 それは、私も同感ですね。ソビエト史の場合、相当に歴史の改ざんがおこなわれた、政治的に必要に従っての。そういう苦い経験があるわけですね。そうすると、中国ではいろいろなものを書く場合に、それを現在の必要に応じて現在要請されているものに従って出されるのでしようけれども、こんどは我々自身について言えば、例えば劉少奇批判がああいう形で出てきた、瞿秋白批判が出てきた、そうすると、今まで劉少奇を賛え瞿秋白を賛えてきた人が、すぐその尻馬に乗ってそれを自分の問題と切り離して言うのは、とてもいけないしインチキだと、僕は思うのです。ただ、ああいう批判の中でよく見ると、ものの考え方として、やはり違った考え方があるんだろうと思うんですね、劉少奇と毛沢東では。そして、実は我々自身の中にもそうした劉少奇的なものの考え方というものが相当いっぱいある。それを自分の問題として、系統的に考えなおしてゆくということで、あの批判を僕はうけとめたいと思うのです。さらに言えば、劉少奇的なものの考え方は孤立したものでなくて国際的なつながりがあったわけで、そういう点からすると、王明のいろいろ書いたものとか劉少奇のものとかいうものを、コミンテルン7回大会の決議などとあわせて、我々自身がもう一度勉強しなおしてみることが必要なのではないかと思います。そういうことではなく、あたかも向うから出てきた批判を直ちに自分のもの

であるかのように言っていたら、中国研究者は信頼をなくしてしまうと思いますね。

藤井 僕はね、劉少奇なんかの問題でも、毛さんなり党中央は実は始めから知っていた、しかしまあ適当にやってきたんだ、ということはほとんどなくて、やはり今度新しく出てきた問題というのが非常に多いのではないかと思いますね。つまり、紅衛兵の動きなり大衆運動なりの高揚も、結局そういう事実そのものが堀り出される重要な契機となった、そういうことはいろいろあると思います。我々が歴史を考える場合、こんど批判され打倒された人びとについて、過去において何も作用がなかったとか、これを始めから抹殺してなかったことにしてよいかというと、そういうことは、やはりおよそ歴史をやる態度ではないと思う。中国の薄い党史の本だったら、途中でダメになった人びとの名前はだいたい出しませんが、こっちとしてはそうする必要は全然ない。むしろ、どれがどういう契機でダメになったかということをはっきり突きとめなければならない。中国の革命史をやるとすれば、結局、ある人物なり派閥なりが、始めこういうふうに出てきて、この時はこういうふうに関わっていたけれども、何年たったらこういうことになった、それは何故か、ということをつきとめることが非常に重要だと思う。そうしなければ、教訓も何も出てこないですね。

野原 いまのこととも関連してくるんだが、日本の研究者としてはやはり考えざるをえなくなる、大きな問題が他にもあります。例えば「新民主主義論」にしても、現在の版と晋察冀辺区の時代の版とは、かなり中味において違う、非常に重要な点で違うわけです。つまり、統一戦線における労働者階級の位置づけが戦後の版と前の版とでは違っていましたね。これは既に今堀君なんかが対照させて論じていましたが、そういうものをそれとしてとらえてゆく方が中国革命史のもっている深刻な意味を描き出すのに、役だつのではなからう

か。そのことは我々にとっては決してマイナスではない。私はむしろそう思っているわけです。中国ではいま、毛沢東の論文は国民に対して一つの教育テキストの働きをしていますから、ああいう形に改訂されることも、やむをえないかもしれません。そういうこと自体、私は歴史的に考えています。しかしだからといって、戦争中の旧版のもっている意味を忘れてしまうわけにはいきません。旧版は戦争中のある事実を反映しているのですから、それを無視して、中国革命史を書くことはできません。日本の場合、中国では過去となったことで、まさにこれから起ってくるような問題が沢山あるでしょう。とすれば、中国人がどんなに苦勞して進んできたかという、その苦勞の道を理解させるためには、僕はむしろ旧版によって中国革命史をわからせる方がいいと思います。

藤井 毛沢東思想にしても絶えず発展してきているのだという問題、それを如実にとらえないといけないということですね。

小島 そういう意味から言えば、毛沢東のごく初期のもので選集に収められていないようなものもあるわけです。かなり商人＝ブルジョアジーの革命における役割を強調したもの、そういう文献がある。それはもう今の中国では出てないけれども、しかし我々からすると、その後革命のルツボの中で毛沢東思想というものが発展し、形成されてゆく、そういう流れをみるためには、我々はそうい

うものをも勉強する必要があるだろうと思います。それは、革命理論や革命思想というものを革命運動の實踐と切りはなして、はじめから出き上ったものに見る見方や、ある種の政治的立場からこの文章を見ると、鬼の首でもとったように、なんだ彼はこの時にはブルジョア民族主義者じゃないか、というんでこれを後までくっつけてしまう人もいるのだけれども、そうじゃないと思う。複雑で困難な、きびしい中国の革命運動の中で毛沢東思想というものが、まさしく形成されてゆくのであって、始めから出来上ったものというのだったら逆に生命力はないんじゃないかと思うのです。**藤井** 言われた場所、書かれた条件とかをすべて考慮しながら見る必要があると思います。劉少奇なんかにしても、公式の席で言うことと、公開されないような場所で言うことではだいぶ違った事をいっているわけですし、また反対に、毛沢東の場合でも、公式には、昔の文献に今から見れば疑問におもえるような言い方があったとしても、では内部では何を言い、何を考えていたかということ、思想の発展のすじ道から見て言外の真意はどこにあったかということ当然考えなければいけないわけで、そういうことは今までに出ている僕らも使える資料でもずいぶんつかめるだろうと思いますね。

中国研究の今後の方向

小島 最後にしめくくりの意味で、今までいろいろ話してきた我々自身の反省を含めて、日本の我々の直面している問題そのものから中国をみる眼というものを持たなければ生きた研究はできないのではないかという話がでたわけですが、そういう動きが今出てきているかどうか、卒直な感想をきかせていただきたいと思います。つまり、今の

全体の傾向がどうかということについて。

例えば、文化大革命についてのいろいろなものをみても、これは僕自身そうなんだけれども、結局やはり解釈をやっていたのではないかと自分で思うわけですね。その解釈をふり返ってみると、空しい。そういうものより、自分が本当にうけとっている文化大革命の衝撃というのは、例えば僕

ら学校の教師をしているわけですが、大学に学生が直接参加して教師を批判する、あるいは「進歩」的教師といっても、資本主義の体制の枠の中で、これを自明の前提としてそこで「進歩」的学問研究をすることにあぐらをかいているのではない、学問が、大学や社会の中での一人一人の教師の生活を規定する原理になっていないではないか、などそういう今の日本の学生が出している問題。また我々自身が、研究者ということを考える場合、潜在的な意識としては、例えば清掃労働者なんかよりも我々の方が価値の高い仕事をやっているという、そういう意識というものは相当根強く入っているわけですね、そういうものをまさしく真向うから否定されているものとして感じる。その中で自分の生き方に衝撃を与えられたというのが、僕の本当の実感であって、いろいろ理論をこねくってやっているというのは、余り自分のものになっていないという気がするのです。しかし、最近の日本のいろんな書かれているものの中には、そういう解釈ではない動きも出ているのではないかと思うのですが、どんなものでしょうか？

野原 一般的な感想だけを述べさせていただきます。文化大革命の問題については、いろいろ中国研究所でも、それなりに勉強してきたし、それなりに意見を発表してきているのだけれども、端的な表現をしてしまうと、読んでなるほどと思ったり、あるいは非常にこちらが動かされたりするようなものは甚だ乏しい。中国研究を専門にやっている人よりも、むしろ外側の人が書いたものの中に、そういうものがある。場合によると中国を直接扱っていないような論文、中国という言葉をはくだけでも書いていないような論文の中に、かえって中国の事態を明瞭に示唆しているものがある。そういう一般的な印象が今度の場合あるんですね。

例えば、『展望』の10月号にのった石川保男氏の「チエコの変動の底流」ですか、あれなんか読んでみると、どうも最後にくると中国問題がそ

こに浮んでいる感じなんです。しかし、彼は中国の中の字も書いていないんだ。チエコがもっている問題、ソ連がもっている問題、フランスがもっている問題、それは日本の問題でもあり、しかもそういう問題と中国の問題とは非常に多く重なり合っている。ということを教えられました。日本では、ソ連がチエコに侵入したことについて、ある意味で国民のあらゆる層がそれを慨嘆するという反応をしめました。しかし、それはやはり見当違いで、そんな点でチエコの問題を考えていたらいけない。ソ連が最も恐れているのは、ドブチエクではなくて、ドブチエクをあのように動かしているもうひとつ底にある力だと思っただけですね。ドブチエク自身は大した問題ではない。ドブチエクの偏向は、場合によるとフランス共産党の方向でもあるぐらいたという感じがする。その底にあるエネルギーを見なくてはならない。その底にあるものが、中国が今努力していく方向とある意味で一致するのではないか。もちろん、石川論文においては、まだそれほどはっきり示されてはいません。まだ暗示的なものであります。しかし、あの石川君の論文などは、中国研究者でなく、直接中国問題を扱っているわけではないのだけれども、そこに何か世界全体を動かしているものが示されており、そしてそれは中国において集中的に問題にされてきている事実だということ、それを教えているように思いました。つまり、社会主義をどう建設するかという問題が、ソ連のあの状況をふまえてもう一回出てきているのじゃないか。ソ連のあの状況は社会主義とは考えられないわけで、ああいう挫折の上にたって、もう一度中国が社会主義というものの本来の道を発見しようとする努力を試みている。それと同じようなものが、ドブチエク政権を動かしている底にある、それを実はソ連が恐れているのであって、まさにチエコのあの動きの底には中国がある。そう話しかけているものと、あの論文をうけとったのです。

このさい、中国研究者は、中国にとり組む姿勢を、立てなおさなければいけないのではないでしょう。中国の問題を、単に中国だけの問題として考えていないで、もっと一般的な問題の中に翻訳し直して伝えるという方向を、中国研究者はとらなければいけない。この点については、『展望』の同じ号にのった山田慶児さんの「工業化と革命」からも大いに教えられた。とにかく、中国にまったく没頭する形の中国研究は、今までよりも一層不信を招かざるをえないときにきている。こないだ岩波の『思想』10月号の「思想の言葉」欄で私が述べていたことも、その意味を誤解している向きもあるようですが、要はこうした姿勢について語ろうとしたものです。私はいまそういう姿勢をとりながら、58年以来放てきしてきている仕事をもう一度回復してみようかなと、こういうふうに思っているんです。しかし、文化大革命のことを直接やるつもりでもないのです。つまり、場合によっては清末のことやたってよいし、何をやってもいいのですけれども、そこに我々が文化大革命までつながるような、そういう形で中国の歴史を、どこをやるにせよやれるようにすること

が非常に重要だと考えています。そのためには、今はやっぱり、中国の現在のこの文化大革命の意味を“中国屋”式でなくとらえる、そういう作業のなかで、自分の中国の歴史なり文化なり、そういうものをやってゆくところの姿勢をととのえていきたい。

藤井 いま野原さんが言われたことで、結論は尽きるのではないかと思います。要するに、中国はいま誰が何と言おうとも世界革命の根拠地になった、と僕は思うのです。だから、中国そのものをとらえるということは結局、世界革命の根拠地としてとらえるということであるわけです。その意味で、日本での問題、日本の革命的な人々に要求されている問題に我々としてもこたえてゆかなければならない。言いかえれば、中国というのは、ある意味で思想的・政治的に大変な先進国であると思うのです。その中国が歩んできた道筋を、ただ一つ一つの局面でなしに、大筋において体系的につかむ必要がどうしてもあると思います。僕としては、そういう努力を今後も続けてゆきたいと思っています。

—— どうもありがとうございました。(斎藤)

七億人民の躍動と世界の革命的人民の動きを伝える

東 風 新 聞

- ◇〈東風〉は西風を圧倒する
- ◇〈東風〉はみんなの大字報
- ◇〈東風〉は中日友好のかけ橋

○購読料(〒こみ)

1部 10円 1年 500円

東京都中央区銀座八丁目二番地
東風新聞社 TEL (571) 1054
振替東京 17838